

厨房から思いを込めて

[第2回]



恵美須孝平 [えびす・こうへい]
介護老人保健施設ひまわり(愛媛県)

前号では私たち調理師が注意していることや、どのような思いで日頃の業務に取り組んでいるのか簡単にお話をさせていただきました。本号では災害時や緊急時の食事対応についてお話をしたいと思います。

近年、地震や台風、大雨、大雪などさまざまな自然災害が日本各地で起こり、時にその被害は深刻で甚大なものとなっております。一昔前までは想像もできなかったような自然災害や異常気象は、人間の英知をもってしても、その予測を越えて私たちに襲いかかるときもあります。こういった事態に常に備えておくことは施設においても大変重要なことであり、特に食事については生き残るためには必要不可欠なものであります。

そんな災害時や緊急時の食事対応について、2018年に起こった豪雨災害の経験をもとにお話ししたいと思います。

目の前で起こった未曾有の豪雨災害

私が勤めて1年目の夏、人生のなかでも忘れることのできない出来事が起こりました。それは2018年7月に西日本を中心に広範囲で起こった豪雨災害です。3年前の出来事とはいえ私にはまだ記憶に新しく、本誌を読まれている方には被災された方もいることとします。

私の職場のある愛媛県大洲市も住宅や事業所の浸水・損害被害が約4,000棟、浸水面積も約1,400ヘクタールと過去に類のない甚大な被害が発生し、5名の尊い命が奪われました。前日から記録的な大雨が降り、私は職場から自宅まで遠かったため、安全を考慮して前日の夜から近くのホテルに宿泊していました。天候も不安でしたが、翌日は七夕ということで素麺に天ぷら、炊き込みご飯といった行事食が待ち構えていたため、絶対に欠勤できないという思いもありました。

水害が起こった当日の朝、ホテルの窓から外を眺めると降りしきる雨とともに、すでに道路が冠水していることが確認できました。早めにホテルを出発しましたが、職場に近づくにつれて水かさは増していき、駐車場に着くころには膝下付近まで冠水していました。

駐車場に車を停めたところに、ちょうど消防団の方が来られて「そこに車置いとったら流されますよ!近くの高台にある公園に停めてください!」と大きな声で指示されました。私は再び車に乗り込み指示された場所に車を止め、そこから歩いて職場に向かいましたが、職場に着くころには膝上まで冠水し、これはただごとではないと初めて気づきました。

なんとか職場に着き、急いで朝の業務に取りかかりましたが、別の従業員が大雨の影響で就業時間に間に合わず、朝食は1品少ない状態で提供することにしました。その後、非番だった従業員が急遽駆けつけてくれ、なんとか時間どおりに朝食を提供することができました。しかし、ほっとしたのも束の間、外を見るとすでに施設の1階はほぼ浸水した状態でした。私たちの厨房は2階にあり直接的な被害を免れたのは、まさに不幸中の幸いでした。

緊急時に問われる判断と対応

朝食提供を終えた後、設備管理の担当者から昼頃には電気やガス、水道が止まるという連絡を受け、その時点で予定献立から災害時の献立に変更しました。

連絡を受けてから、まず私たちが取りかかったことは、ライフラインが止まるまでに可能な限り、水やお湯をストックしておくことでした。

業務用の回転釜であれば、沸かして蓋をしておけばある程度の時間まで冷めることなくお湯を保温でき、そのお湯を使用して湯煎解凍で提供できる総菜などを温めることが可能です。調理から提供までの時間を考慮し、配膳時間を早めてもらい、電気やガ